GR
白雲郷

とりゐ

49

埼玉　名栗

昭和55年10月1日

宗教法人
白雲山
鳥居観音

表紙の説明

救世大観音入口を警護の獅子

玄関入口の紅色のねじり柱はギリシャ、クレタ島のクノッソス宮殿のさかさ柱（上が太い）を模したものである。左右にこの柱の根元を３匹の阿吽６匹の獅子がとりまいて入口を警護している。

とりゐ第49号目次

表紙　救世大観音入口さかさ柱をとりまく獅子
白雲山の紅葉……一
道光禅師御法話（其の三一）……二
観音行の実践……光山善雄……四
西遊記（其の四二）　岡部千三……六
田舎医者（其の二八）　見川鯛山……八
鳥居観音だより……一一
当季雑詠……二四
裏表紙　鳥居観音地図
行事案内

白雲山の紅葉

四十年の年輪

平沼桐江先生が、聖観世音菩薩を本尊として当山を開かれるや、先ず山内に西川林の面影を止めながら、林内に道を拓かれ、山内の風致を一そう美化するために、沢山なもみじの木を植えられて、自ら従事者をとくれいされながら、肥培、撫育にあたられましてから、もう四十年の歴史の中に育ちました。

そして今は当山の名物になりました。

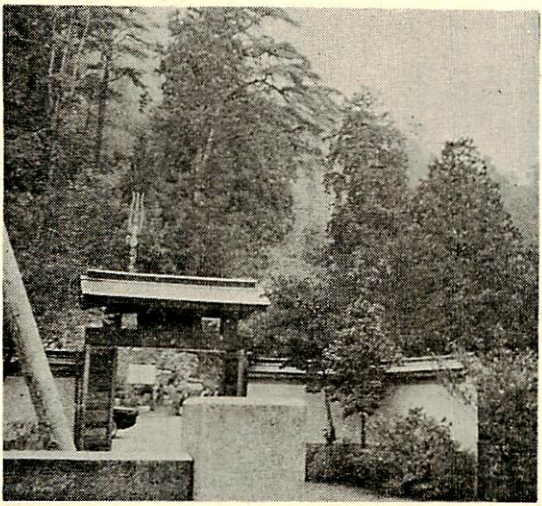
併せてつつじも植えられたのです。春のつつじ、秋はもみじと、有名になって信仰と行楽とで、季節になりますと、沢山の人が参拝かたがたお見えになります。

平沼桐江先生の先見の明とでも申しましょうか、衆生ロロに当山の観世音菩薩は勿論、この山の美には心うたれて参拝されております。

西川林の面かげをとどめた中に、燃えるようなもみじが年と共に歴史と共にいろどられます。

白雲山の紅葉を皆様方のお声でひろめていただきますようおねがい申し上げます。

合掌



四十年の歴史を語る山内

道光禅師（故高階瓏仙猊下）御法話

世間　（其の三一）

「浮世わたるは豆腐でわたれ、まめで、四角で、やわらく。」

という俗謡がありますが、おもしろいと思いますつぎは第二態容。文に、

「態容は安静にして軽騒なるべからず、是れまた本来空の活動にぞくするをもって、自分の職業に相応すべし」

とあります。

子供はそうでもありませんが、大人がけそけそしていて、おちつきがないと、どうもその人は信用のないもので、とても大事なことはたのめません。むかしから態度については「緩行大歩」とか「牛歩」といって、緩やかに歩いて鷹揚なところがなければなりません。牛歩というのは、牛が歩むように、一歩一歩ふみしめて歩く態度であります。しかしこれもまた、本来空の活動にぞくしますから、さあ隣が火事だというようなときに、牛の歩みでいかれたのではしかたがありません。水が出て堤防がくずれるというのに、のそのそとやっているようでは、時と場合を知らぬというものであります。こんなときにはあわてて、急いでいく必要があります。また電報配達が、安静にして軽騒なるべからずといったからとて、緩行大歩ではこまります。ゆえに「自身職業に相応すべし」といってあります。それから顔貌でありますが、これは生まれつき与えられたものですから、顔の構造をいまさら設計しなおすわけにはいきません。しかし、人は心がうちにあって、それが外にあらわれるのですから、精神が平和であれば、それが面にあらわれて和らかく、ほがらかに感じ、よく見せるものであります。だから顔のできや設計が、わるくできていても、人にふれて感じのよい顔

貌が、非常に大切なことであります。それには今のうちに、平常の心もちが大事であります。いつも精神がおだやかで、春風にふれるような気分を、人に与えるように心がけることであります。それで文に

「顔貌は温順にして、柔和なるをよしとす。本来空なるときは、心気平なり、心気平なればそれが自然に外にあらわれる。しかれども事にふれ、物に応じて宜しく活動あるべし」

とあります。

だからといって、いつもニヤリニヤリばかりしているようでもいけません。仏さまでも地蔵尊の半面に、不動尊もありますように、慈悲の上に、親切の上からは、ときには憤怒の顔も必要であります。つぎにはことばづかいです。これは、たん的にくるものでありますから、よほど気をつけなければなりません。それで文に、

「言語は自己の意志を通ずるをもって足れりとす故に多からんよりむしろすくなきを良しとす。華ならんよりもむしろ実なるを良しとす」とあります

ことば多ければ、品すくなしと申してありますがおよそ「ことば」は要領を得ればよいはずのものであります。しかし要領を得ればよい、すくないのがよいからといっても、あまりぶつきらぼうではおもしろくありません。「暑うございます」……

「わかっとる」……というような返事の仕方もこまります。それはわかってはいるが、そこには多少の綾がなければなりません。それかといってあまり駄弁が多いと追従になります。追従は全く人に悪感をあたえるものです。

それから、文に、

「直言ならんよりむしろ温言なるを良しとす。理論ならんよりむしろ情実なるを良しとす」とあります。これは例をもっていいますならば、友だちに悪いことがあって、忠告をするにも「君、あんなことをしてはいかんじゃないか、少しはつつしめ、僕は忠告をする」というように、ぶしつけないい方をしますと、忠告はよいことですが、あまり直言でいきますと、かえって感情にさわります。

（次号）

観音行の実践

兵庫県
西正寺
光山　善雄

苦悩の解脱

大阪や東京の混雑、沢山の人が動いている。夜になるとねる宿に皆帰ります。地球上には三十億以上の人間が生活しています。

ここでは無量百千万億の衆生とあります。十方衆生のことで、みな苦悩の持主です。人生に苦悩なかりせば仏法は必要でないでしょう。財があればあって、なければないで苦るしんでいます。牛や豚には苦悩はなさそうです。

「善男子」とは善男善女のことで、この生老病死の苦を四苦と申しております。生れる時は笑って出るのではなく、母の胎内より出生する時は痛い思いをして、「オギャァ」と叫んで出て来ます。

病気をする。怪我でもすれば母の心配は大きいのです。一人前に育てるにはお金ばかりでなく大変な努力が必要です。

人間は老人となります。これは仕方がありません最後は死に直面いたします。老少不定でいつ死が訪れるかわかりません。最近の交通地獄は大きな問題と思います。

その他に愛別離苦、求不得苦　怨憎会苦　五陰盛苦を合せますと八苦になります。

人間は苦悩の入れ物で、苦悩の動物です。老人の年金制度が完成しても、死は来るのです。可愛い子や孫、夫や妻に別れるつらさ、お金が欲しい美人が欲しいと思っても、そうやすやすと吾が物にはなりません。これが愛別離苦、求苦得苦です。いやな奴と時時遇わねばならないのが、怨憎会苦であります五陰盛苦とは、われわれの身体が青年の時は色欲盛んで、その精力を調整することが容易でありません人間は性のためにも苦悩する動物です。そこで上の四苦と後の四苦を合せて八苦となりましょう。

この苦悩を除く方法、解脱することを教えて下さ

いましたのが、観音様で、苦悩解脱の方法は南無観世音菩薩の名号を称えることであり、これが苦悩を除く解脱の道であります。一心に観音さまの尊号をとなえれば必ず苦悩が除かれ解脱することができるとあります。

観音さまの威神力を感ずるには一心称名よりほかにありますまい。聞くとあるは信ずることであります。これを三つに分けて見ますと、聞き分ける人、聞き開く人、聞き得る人、この三種の聞きようを考えますと、聞き得る人は少いのです。観音経の趣旨をよく知り、三十三身の示現、十九の説法と、学問的に聞き分けても、それだけでは解脱はできません

観音さまを信じ、一心に称名することが大事なことで、これより外に観音さまの解脱法はありません観音の道理を聞く、合掌のいわれを聞く、これは聞き分けた人で、丁度御馳走のカロリーの説明のみではお腹は満腹いたしません。聞き開くとは疑いのなくなったこと、花が開くを開花という。心のうたがいが晴れたことを胸が開いたと申します。

即ち聞即信で、観音さまを心で信じ口で称え身で礼拝することです。口と心が違うニセ信心では解脱はできません。聞いて信じ一心に称えるものを救うと仰せになっている。だから南無観世音菩薩と一心に称名せば、すべての苦悩は解消して解脱することができましょう。

三毒を三徳に転換

「若し遇痴多からんに常に念じて観世音菩薩を恭敬せば、便ち痴をはなるることを得ん。無尽意、観世音菩薩は是の如き等の大威神力有りて饒益する所多し、是の故に衆生常に応に心に念ずべし」

三世因果の理に暗きが愚痴でありまして、愚痴の反対が自覚であります。昔はこうだったと古家の歴史を誇る人は愚痴をこぼす人に多い。昔の大名や華族が現代では通用しない時代ですから、その解決方法は観音さまと離れない信仰を持つことです。

親心を忘れたとき愚痴が出るので、（以下次号）

西遊記（其の四二）

岡部千三

正体

つづき

「いやだといっても、たべさせますよ。」

おそろしい顔をして、ぐるりと、法師をとりまいてしまった。法師は、逃げ出そうとしたが、家の入口をふさがれているので、外へ出ることができない

はじめに法師が思っていた通り、その家はあやしい家で、七人の女達は、みんなおそろしいまものだったのである。

女達は、ふところから糸をくり出して法師をしばりあげ、はりにつるしたあげく、家のまわりを糸ではりめぐらしてしまった。法師は、動くこともできない。あまりのおそろしさに声もでなくなった。

法師のかえりがおそいので、悟空、八戒、悟浄はそろそろ心配しはじめた。

「これはおかしい。何かわるいことがおこったのではないかな、八戒と悟浄はここにいてくれ、ちょっといって、様子を見てくるから。」

悟空は、ずぐ如意棒をかかえてきんと雲にとびのった。そして、空の上からすぐに、法師のとじこめられている家を、さがしあてた。

「思ったとおりだァ、おししょうさまは、この家の中だ。それにしても、家のまわりのこの糸は、なんだろう。土地の神にきいて見よょ。」

じゅもんをとなえて、土地の神をよびだした。

「ここは何というところなのか、このあたりに、あやしいやつがいるのではないか。」

「はい。ここは盤糸嶺といいますが、山のふもとに、盤糸洞というほら穴があって、そのほら穴は、七人の女のまものが住んでいます。」

「ははあ、さてはその女のまものたちが、おししょうさまをかくしたのだな。そいつらにあうには、どうすればいいのか。」

「そうですね。温泉にはいっている時はどうでし

ょう。女どもは、毎日温泉へ行きます。それは、なかなかきれいな温泉ですよ。」
「きれいでも、きたなくても、そんなことはどうでもよい。おししょうさまさえ、おたすけすればそれでいい。」
悟空はまものの女がはいりにくるという温泉へ走っていき、一匹のはえになって、草の上にとまっていた。今か今かと待っているところへ、七人の女達は、ぺちゃくちゃとしゃべりながら、やってきた。
温泉は、ぶくぶくとわきあがり、まわりには、きれいな、らんの花が、うつくしく咲いていた。女たちが温泉にはいると、悟空はたかになって、女たちの着物をくわえた。
「あれあれ、たかが、着物をぬすんでいくわ。」
女達がおどろいて、さわぎ立てるのを見おろして悟空は空高くまい上り、八戒や悟浄のまっている、もとの原っぱへもどってきた。
「きょうだい、きれいな着物をたくさん持ってきたな。どこからぬすんできたんだ。古着屋でもはじめるか。」
八戒は、のんきなことをいっていた。
「ぬすんだというわけではない。おししょうさまをとじこめた女たちが、温泉にはいったから、すきをみて持ってきただけだ。はだかでは、温泉からでられまいょ。」
「よしそんなら、おれが、そのばけものの女たちをぶちころしてやる。きょうだい、ばけものは七人いるんだな。七人ぐらいへいきだ。」
八戒は、温泉へかけつけたが、女たちを見ると、わるくちをいいだした。
「こら、まものの女たち。よくきけ。」
八戒は、長いはなをつき出していばった。
「おまえたちがとりこにした方を、どなただと思う。あの方はな、唐の国から、天竺へ経文をとりにいかれるとうといお坊さまで、三蔵法師さまというお方だ。法師さまに、ぶれいをしたおまえたちを、そのままにはできない。法師さまのおでしさまの八戒さまが、このまぐわで、ぶのめしてやる」（次号）

田舎医者（其の二十八）

見川鯛山

うどん

つづく

雉はどこにも落ちてないのだ。とぼとぼと戻ってくる大将の軽蔑と憎悪に満ちた目から、私はそっぽを向いて顎なぞ掻いていた。

大将が働かなくなったのは年のせいばかりではなさそうだ。うちの奴らときたら、こいつまで私を馬鹿にする。そのくせ私が鉄砲を持ち出すと、大将は犬小屋から坐骨神経痛みたいにしぶしぶと腰を立て大きなあくびを……してから私の後をついてくる。弁当の卵焼きだけが楽しみなのだ。

とにかく昼だ。なんとかしなければ……。

雑木林を抜けると寅さんの家があった。私は彼と仲よしだし、往診に来たこともある。私が黙ってすわれば昼飯ぐらいさっと出してくれるのだ。

戸を開けて声をかけたがだれもいなかった。

裏山へ落葉掻きにでもいっているのだろう。どうせ昼だ、間もなく帰るにきまってる。

私は靴のまま炉端にすわり柴木を焚いて鉄びんの湯をわかした。茶盆の梅干しをつまみ、茶をいれてのんだ。

座敷にテレビがあった。私が這っていってスイッチをいれるとツマミがこわれてはずれた。

そっと、もとどおりにはめこんでいたら、大声で流行歌がなりだした。しかし、画面はいつまでたってもうつらないのだ。私がいつもうちでそうするようにバタバタと箱をたたいても、駄目だった。

台所で大将がくんくん匂いをかいでいた。なにかたべ物があるにちがいない。行ってみると、大将が

丼をひっくりかえして煮豆を食っていた。
「他人様のものを……ぎょうぎがわるいぞー」
叱ってやったがおそかった。私の分は一粒も残っていないのだ。
戸棚を開けたら乾しうどんがあった。私は鉄砲をかけて湯を煮立て、うどんのたばを放りこんだ。白い泡がたち、湯気が顔をなでていい匂いだ。
茶碗も箸も醤油もあった。そして棚の奥の方には味の素までかくしてあるのだ。
膳立てがそろうと、鍋のうどんがテレビの流行歌にあわせてクルクル廻ってゆだった。
私はにこにこしながらうどんを茶碗にすくい、醤油をたらし、味の素をぶっかけてズルズルとすすった。それがすてきにうまいのだ。
ふと、手拭いをかぶったかあちゃんがはいってきて、こっちを見てびっくりした。
「私だよ、鉄砲に来たのだ。弁当を忘れちゃって腹ペコだ。勝手にごちそうになってる」
あいさつしたのに、かあちゃんは黙って出ていってしまった。なんてあいそうのない女だ。……
こんどは寅さんがきた。彼は太い棒を持っていて、その背後にかあちゃんが立っていた。
二人とも、暗くて私がわからないのだ。
「ひとんちへ勝手にはいりこみやがって、飯までくらいやがる！　ずうずうしいやろうだ、おめえ空巣ねらいだべ！」
寅さんがどなったが、私はニヤニヤしながらうどんを箸でつまみあげて言った。
「うまいうどんだ。これここでつくった粉か？　まっ白くていい粉だ」
すると、寅さんがふるえて怒るのだ。
「このやろうッ！　あきれた泥棒だ。さっ表へ出ろ、いっしょに駐在さ行くだ！」
見ると男は寅さんではない。
「あんた、誰だね？」私の方からきいた。
「あんた誰だァ！　ふざけんな、おれァこの家のもんだ。なんてことぬかすだこのやろう！」
「このうちの？　じァ手伝いにきているのか？」

「ここのおやじだおれァ！　さっ出てげー」
男が棒をふりあげた。なんだか知らぬがなぐられそうだ。私はうどんを持ったまま逃げ腰になり大声で言った。
「私は空巣じァないぞ、ウソだと思うなら寅さんにきいてくれ！」
「寅がどうだってんだ！　寅は寅だ。おれァ熊吉だ！」
私は口からうどんをぶらさげ、目をパチパチさせた。
「おれァ熊吉てんだ。これァおれのかかあだ。んで、ここはおれンちだ！」
「じァ寅さんは？」
「寅は隣だ！」
寅さんがきてくれた。
「おれ、こんな人知らんな。どこの人だべ？」
彼が昼めしの歯くそを掃除しながら言った。
「そんな……ひどいこと言うな」私があわてだすと、
「さぁてな？　そういやどっかで見た顔だな、営林署の人だっけかな？　そうじァねぇな、営林署が空巣にへえるわけねぇしな。
空巣にしちァ間のぬけたつらだしよ。そらすっとこりゃやっぱり那須の医者様だったかな」
寅さんは笑いながら片目をつぶり、私をばかにしてるのだ。
かってにしろ！　私は泥靴であぐらをかいて、うどんをズルズルとすすった。

バナナ

この村にもバーができた。街道の自転車屋が始めたのだ。
「ハバナという店だが、村の人たちはみんな……
「バナナ」と読みちがえている。付近の開拓部落や旧農家の若者たちには、なかなかの人気だった。
去年、自転車屋はかみさんを亡くした。彼女は赤ら顔で首も腕も太く、力持ちだった。　（次号）

鳥居観音だより

つつじまつりのまとめ

四月一日、つつじまつり開催、三ッ葉つつじが、春にさきがけて咲く、木々の若葉と共に、花の紫が白雲山を綴って、あたかも絵模様のようだった。

四月十五日頃から花は満開となり、自然美はいよいよ深まり、参拝人の目を引いた。

四月十七日の春季例法要は花の満開の中で修行され、来賓各位を始め、多数の参拝者が登りながら、下山しながら、感動を深められた。

四月下旬になると紫つつじが終って、紅つつじに咲き変っていった。新緑となりその調和も変った。

五月の連休を利用しての来山は数も増して連日にぎわった。

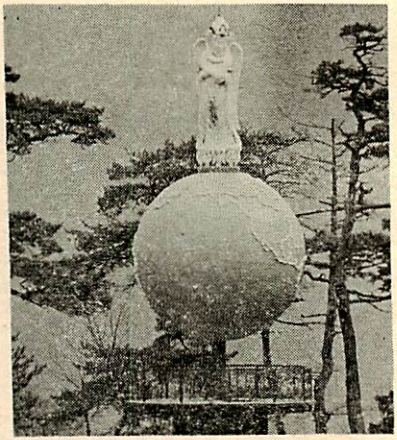
当山のつつじは山内に数万本が植えられているが株も太り、枝も大きく張って来て、どれも、これも見ごたえがあるようになった。

堂塔の庭にたたずみながら、花と新緑に見あきぬ人が、年毎に多くなった。

白雲山の春、さきがけて咲く、三ッ葉つつじは、葉が出ないうちに、つぼみをふくらませて、中からむらさきの花が咲くのである。

みつばつつじ

遊歩道の入口から竹林で、その間をぬいながら登るとやがて仁王門がある。ここの花もうつくしいが、王門をくぐって、地球愛護平和観音のある所は、見晴し台ともいいいものである。



この地球愛護平和観音のある所は、見晴し台ともいい救世大観音を北方に拝し、近く玄奘三蔵塔、大鐘楼も花の中に見ることができる。

花と松林をすいて名栗の里が見下ろされ、その中に名栗川が、せせらぎの音を立てて流れている。

もうこの頃になると河鹿が啼き、旅情をなぐさめみどりと清流の自然を、しみじみと感じることができる。

このむらさきの三ツ葉つつじは奥武蔵地方独とくの植物で、平地の方面に持って行っても長くはもた

平和観音の附近のつつじは、当山唯一のつつじ園だ

自動車で登る人はこの附近の美観を味わうことができないのでおしいことである。ぜひとも春の白雲山は遊歩道を静かに眺めながら探勝していただきた

ないようである。

山のけわしいところ、岩間に生えて、木々の間に咲くところがこの花の美観である。

見晴し台から岩場の道のながめもすばらしく屋根のある休けい所で一休みしながら東南を眺めるのもよい。この辺は一面のつつじの谷となって濃淡乱れ咲いて、見る人の顔までが、花の色にそまるかのようで、うつとりする。

この休けい所を出ると山内の横道となる。この辺りが西川林の発祥の美林が残されていて何ともいいようのない林相が空を突いている。この中にも、つつじとかん木の若葉がいろどり、樹下のおもむきがでている。

林間の横道をゆっくり行くと、石の橋がある、白雲橋という。重量拾トンもある石の橋で、この橋を渡ると、健脚になるといわれている。

橋のそばに寛から清水が、流れている。自然そのままの水だから、実においしい。

このあたりのつつじもうつくしく、檜の林の中に咲きほこるながめはつきないところである。

この上に玄奘三蔵塔がそびえている。大鐘楼も近づいた。

急斜面の林の間にそして岩場に花々のつつじでかざられる。

三蔵塔の広場に腰かけて、北方秩父の連山をながめ東方高水の山を見たりしながら、玄奘三蔵塔の内庭に入ると、ここは珍らしい南方風の建物でうっと

りしながら歩をめぐらしながら、すばらしい…と声を発しながら、あちらこちらと、ながめる人がある

北方近く救世大観音を拝すと、どちらも海抜は、五百米近いところで、よい対象である。

ふたたび広場へ出て、岩を切りおとしたり、山の斜面の土を切り取って、拓かれた道を三百米いくと写経塔、百米先に目ざす、救世大観音様が空高く東方に向いてそびえ建っている。

この附近のつつじも他におとらぬ眺めで、とくに写経塔の附近のものはうつくしい。

弁当をもってここまで来て、ひるげをとる人も見うけられた。

このあたりの花木は多種多様で、五月六月にかけて花が咲くのである。

三ッ葉つつじはきり深く空気の清浄な岩場がよいようである。したがって当山には処々に岩場があり空気もよく、きり深で土質も適していると見えて、このようなつつじの名所となったのである。

当山のつつじまつりは年々すばらしくなる。

五月九日　金　曇

岩井良太様のご紹介で、スケッチクラブの方々、三十五名来山　代表浦和市太田窪　窪田良平様引卒

五月十一日　日　晴

入間市吉田健様来山

徒歩、自動車入山多くなる。

五月十二日　月　晴

平沼開祖ご夫妻来山。至極お元気である。

毎月来山されるのが何よりのたのしみでいらっしゃる。ふるさとの名栗。もさることながら、開山された、ご夫妻にとっては、愛着切々とお察しする次第です。

かくていつもご夫妻は、参拝されながら、観音経をとなえられる。その様子は……

それはもうすべてから解脱されたお姿と拝されるのである。

山をおりられて、庫裡でいろいろなお話を伺うのだが、すべて教えられることのみで、恐縮する次第である。

五月十八日　日　雨晴

中野の田辺さわ様来山、この方も名栗の出身で、信仰厚く、年に何度もご来山されて、いつも山内へお一人ででも、歩いて山を巡拝しておられる。

午後入山多くなる。

五月二十六日　日　曇

東四ッ木　江端政吉様ご一行来山。三峰神社参拝のお帰りに立寄られた。

山内にぎわう。

六月二日　月　雨

東京植村せつ様来山

狭山市小島さわ様来山

六月四日　水　晴

観光バスで来山、附近探勝、五〇名

六月七日　土　晴

朝霞市広瀬秀雄様来山

杉並善福寺野崎直澄様来山　写経持参

六月十一日　水　曇

平沼開祖夫妻来山

六月十二日　木　晴

杉並区江崎元堂様夫妻来山

塔婆供養の準備にかかり、案内状発送す

六月十三日　金　曇

自動車の入山多い。

六月十四日　土　晴
入間市豊岡末広会四十余名来山
六月十七日　火　曇
一万体観音申込　畔川和子様
青梅市大柳講三十名来山
六月二十二日
塔婆供養申込　飯能市石塚様
六月二十六日　木　雨
一万体観音申込　行田市須郷様
塔婆供養申込　松井様
六月二十七日　金　晴
昭和五十五年度役員会開催
午前十時　監事会　武居、平沼監事
午後一時　責任役員会　岡部、尾尻、有馬役員
吉島公認会計士事務所から出張説明あり。
六月三十日　月　曇
狭山市六本木初代様来山
七月一日　火　曇
目黒、若林とく様外塔婆供養申込あり。
七月二日　水　雨
八王子市　阿部様　塔婆供養申込
七月四日　金　曇
飯能市原市場　高橋謙吉様来山奉納拝受、
流灯供養案内発送開始、
秩父市小池様　塔婆供養申込あり。
七月七日　月　曇
参拝者多数、塔婆供養、朝霞市広瀬秀雄様多数の
御申込あり。
大泉学園町滝田トキ様塔婆供養多数申込あり。
東松山市中里勇吉様　塔婆御申込拝受
坂戸市平井様外申込多数
七月十一日　金　雨
与野市井上正雄様流灯供養申込多数
一万体観音申込、東村山市　比留間良二様
七月十四日　月　曇
流灯申込、杉並区江崎元堂様　青梅市　富田様
日高町　斎藤郁夫様
大宮市　田中義人様　受付

七月十六日　水　曇

東京の盆、午後二時　救世大観音堂宇内

塔婆供養、導師当山尾尻老師

開祖平沼先生夫妻、滝田トキ様、松井吉雄様、

当山関係者列席で修行。

供養塔婆五五〇本

夏の果物、野菜等を供え施餓鬼にふさわしい準備がなされた。

夏といいながら、涼しい法要だった。

七月二十日　日　晴

自動車の入山多し。

七月二十三日　水　晴

流灯の申込始まる。子供の入山多くなる。

三鷹市　本村その様外　五七

葉山　永井頴信様外　八五

東京　平沼新八郎外　七八

飯能市　山崎　完様外　六九

府中市　山本芳枝様外　八三

七月二十八日　月　晴

流灯供養申込　東京津村幸代、内田桂一郎、佐野松枝外一、名栗野本栄治外九、東京志賀豊三、吉田孝外五、飯能平沼玉枝外三、東京大友清治、小川勘兵衛（敬称略）

塔婆施餓鬼に来山の開祖夫妻

七月二十八日　月　曇

流灯法要申込受付　東京松井吉雄五〇、名栗岡部安一外九、同佐野正助外一五、同枝久保鶴四郎外二五、同浅見達次郎外一五、同浅見光雄外九、同八区五〇、同諏訪九、同吉田仙太郎外一九（敬称略）

七月三十日　水　小雨

流灯法要申込受付　埼玉トヨペット講元梶谷真一外三八五、東京高田与志外一〇　同植村セツ外一五川越斎藤恆作外三〇（敬称略）

○参道大灯ろう、寄付受付　壱基、杉並植村秀三、秋田市石塚清之助、秋田市八嶋豊、兼子喜代子、以上四名様

八月一日　土　曇　　毎日雨空、曇空つづく

冷夏という異常気象に夏休気分そう失。

流灯供養申込受、名栗町田要一外一〇、東京市川貞次郎外一〇、名栗平沼幸一外一九、名栗町田延行外五五、同片山武夫外一〇（敬称略）

八月三日　日　雨

流灯供養申込、名栗矢島武一外八〇

八月六日　水　曇

流灯供養申込　飯能小川文雄様外一二五

八月七日　木　晴　　久しぶりに天気よし

流灯供養申込　名栗岡部仲次郎様外五八

〃　所沢小山権之亟様外一一五

八月十日　日　晴

流灯供養申込　飯能水上清様外一五五

〃　板橋榎本みや子様外七七

〃　瑞穂町鈴木つる代様外三五

〃　大泉学園町滝田トキ様外八七

〃　入間市粕谷達二様外二五

〃　町田市小林君子様外一五

〃　朝霞市広瀬秀雄様外八五

八月十三日　水　晴　名栗の盆迎火

開祖先生夫妻来山、お元気である。名栗の盂蘭盆なので、祖霊のお迎え火もなさった。

流灯供養の準備も進み千数百の絵灯ろうが本堂に供えられた。

参道、本堂附近も掛提灯がつるされた。

八月十六日　土　雨　盂蘭盆流灯会

冷夏という中での流灯は淋しいと思っていたが多数のご来山で、意義深かった。

午前十時瑞穂町鈴木つる代様一行三〇名

十一時　板橋区榎本様一行五〇名、が早々と来山

午後四時本堂供養開始までには、開祖先生ご夫妻所沢講元小山権之亟様、川越新友講元斎藤恆作様等の方達がお待ちになっていた。

導師は、当山尾尻老師、有馬、鯨井両老師の三老師により修行された。

午後五時三十分、げんしゅくのうちに終了した。

供養参加の人達の休けいの庫裡広間

灯ろうはご自分で流すという人、当方に依頼する人、

あいにく小雨となったので、名栗川まで各自が運び出すのが一仕事である。

幸川原にはテントが張ってあったので全部その中に積み重ね、流灯の開始時間を待った。

午後七時いよいよ流灯が始まった。

三老師の読経の声が川面に流れると、絵灯ろうに灯が点ぜられ、多勢の人達が手に手に持って川面に流灯された。

川面にうつる灯かげが、波にくだけ、めいめいする灯のあやが、精霊送りの人々の面輪を川原の闇にてらし出した。

沈黙の人、涙ながら合掌する人、精霊送りという行事はすばらしいものである。

全部の灯ろうが流し終ったのは始めてから三十分後であった。

電灯の合図によって、川下に仕かけられた、仕掛花火が打ち上げられ、川をまたぎ、かなた、こなたから、電光雷、青柳、菊花数々の花火が空にとどろいた。煙幕が川原近くに拡がった。そしてその中に雷鳴がとどろいた。すると、岸から岸に引かれた、一連のつなに火がつくと、たちまち、それが滝となって落ちた。

いつか小雨も止んで、静かな川面は小暗くなった

本堂入口の広場に、準備された、やぐらをかこんで村の民踊愛好会の人達が、そろい浴衣もうつくしく、マイクから流れる、民踊の曲に踊り始めると、観世音センターに泊った客達も参加された。

そのうち村の若人衆も集って踊った。

いつもなら暑い盆の夜なのだが、本年の盆は涼しかったので、何か淋しかった。

午後九時には一切の行事を終えて解散した。

八月十七日　日　曇

一万体観音者申込受付　一千代田区　萩原捨三様

八月二十日　水　雨

真言宗豊山派仏教婦人会事務局より四名下見のため来山、受奉納

立川市　小林様夫妻来山、受奉納

八月三十日　土　曇

静岡県藤枝仏教婦人会の参拝団十二時到着、バス四台、二百名の団体は堂にあふれた。

十二時三〇分、本堂参拝、続いて尾尻老師の説明と案内があった。

本堂内のご本尊始め六観音のかれいにうっとり。また壁画、天井の画面にも目を見張られた。

それから白雲山上の救世観音へ全員参拝されて、又々おどろきの声を発せられた。

堂宇前の庭から見る全景のスケール、観音様の体内から上にのぼった感激一入であった。山内の樹海の中に見えかくれする、玄奘三蔵塔、大鐘楼、写経塔、地球愛護平和観音等指呼の間に点在するのが人の目を引いた。

静岡の藤枝を早朝五時に出発されてから七時間、車中のおつかれも忘れて、ていねいに参拝されたのには頭がさがった。

午後三時にはふたたび車中の人となられ一路、藤枝さして帰路につかれた。

車からおりて庭内にはいられた参拝団

九月二日　火　曇

開祖平沼桐江先生ご来山、本堂から救世大観音、読経、焼香され、隅々、一木一草までに目を注がれ山の小あじさい、秋かいどうを土産に三時元気にお帰りになった。

川口から来山された老人紳士、若い参拝者と、堂宇内で対面され、彫刻から建立のお話に花が咲いた

九月三日　水　晴

奥日光、湯元温泉釜屋旅館の奥さんと近所の方達五人、若主人の運転のマイクロで来山。庫裡での話

平沼先生ご夫妻が、釜屋旅館に泊られて、奥日光の自然に親しまれ、又釣などもされたとか、なつかしそうにお話しになった。

（今文庫にある釣人の木彫は先生のその頃のものであると知ると、いよいよ面白い作品である。）

九月五日　金　晴

名栗村老人クラブ、名和会二十名参拝。

練馬区俳句会々長伊奈様が主催する句会開催の会場として申し込あり。

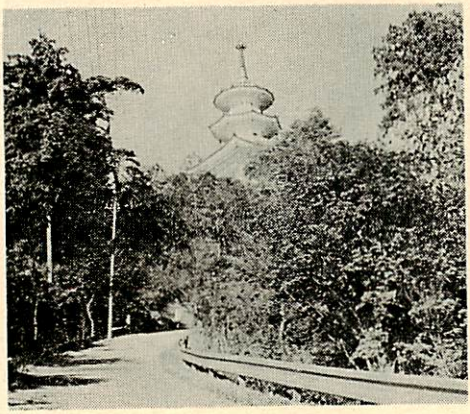
これからの行事

紅葉狩

十月十五日から十一月三十日迄として開始します

多種多様な楓が白雲山の中に撫育されて、今は四十年の年輪をもって、株も枝葉もよい形をつくってこれが秋となると、自然に色づいて、濃淡いろいろの紅と黄が峯から中腹の岩場、そして山麓へとそめ下ります。

十月十五日頃は三分月末が七分十一月十日頃が真盛りとなります



昨年東京から来山された方が、日光のもみじよりこの山の方がうつくしいと、心からほめておられたのもお世辞ではないと思うほどうつくしいのです。

自然が染めなすもみじを神がそめられると言って昔は、たった姫がそめると言ったものです。

白雲山の紅葉探勝は自動車で車の登山道で行くのもよいが、山をめぐりめぐって登る遊歩道がある。春のつつじの探勝もこの遊歩道を上られてご存じと思うが、もみじ探勝も是非この道を利用していただきたいものです。

当本堂は白雲山の麓にあり、七観音がありますから、ゆっくりとご参拝下さい。

秋季例法要

十一月十七日　午前十時三十分から恒例の秋季例法要を修行いたします。

本堂法要　十時

救世大観音法要　十一時三十分

マイクロバスで山頂へご案内申します。

もみじもきれいと思われます。どうぞご参拝がてらごゆっくりご探勝下さいませ。

十一月三十日　紅葉狩終了。

大黒祭

十二月十日　午前十時三十分

本堂内に祀られた大黒様が一段と目立ち観音様と共に拝まれています。

今日大黒様のご縁日としてお祭りします。どうぞ年末ご多忙をお繰り合せご参拝下さい。

大晦日と除夜の鐘

十二月三十一日　午後十一時四十分

大鐘楼現地に於て、一〇八の鐘をつきます。

この除夜の鐘をつく行事は年の終りに行なわれる最後の宗教行事で、まことに身の引しまる思いで当ります。テレビの紅白歌合戦をあたたかい部屋で、見ながら年を越すという時代に、眠いのをがまんして寒さをおして、一〇八の鐘をつく行事とはよい対

照的なことです。行く年、くる年、人それぞれに、反省と希望がありましょう。一〇八の鐘の意味をしらべてみていただくこともよい機会であります。

新年初祈禱

昭和五十六年一月一日　十時　祈禱修行

十一月に入りますと御案内いたします。

除夜の鐘から清新の気持で、元旦をお迎えになり新年初祈禱によって、御利益をいただいて一年の計が全ういたされます。

願旨　家内安全
　　商売繁昌
　　交通安全
　　諸願成就
　　試験合格
　　安　　産
　　良縁結合　　其他

祈禱料金弐千円、参千円、五千円以上

尚年間いつでも修行いたします。

当季雑詠

山門をくゞれば藤の黄葉散りぬ　千昭
行く秋や心の生活欲しき郷（さと）　狂句郎
風あればいつもゆれてる芒の穂　倫一郎
今朝も又いちょう落葉を僧が掃く　松次
合掌の手に散り来るもみじかな　とし子
参道（みち）行けばもみじが髪に散りかかる　静江
秋の水白雲橋にしたたりぬ　正義
鐘の音の余韻も冴えて谷渡る　圭治
草紅葉もえて地蔵のひざかくす　忠雄
行く道に散りしく紅葉そっとふむ　天外
りんどうの花むらさきの色濃ゆく　滴水
琴平へ上る急坂ならもみじ　霞山

とりゐ　第四十九号　発行日　昭和五十五年十月一日
編集兼発行人　埼玉県入間郡名栗村　鳥居観音　岡部　千三
印刷所　浦和市仲町二―八―十五　武州印刷株式会社
発行所　鳥居観音　電話　〇四二九七―九―〇四一七

白雲山 鳥居観音 観世音センター案内図

琴比羅神社
棒の峰
秋葉山
有間渓谷
納経塔
面白岩
三蔵塔
平和観音
白雲橋
見晴台
大黒殿
自動車道
大鐘楼建立
救世大観音
休憩所
観音滝
子育地蔵
仁王門
トーテンポール
玉華門
梅境の墓
諏訪神社
稲荷神社
梅月橋
阿吽型四阿
炭谷川
庫裡
本堂
鳥居文庫
ますつり場
観世音センター
父峠
至秩父
鳥居観音入口
名栗渓谷
水泳場
50分
飯能
25分
名栗川
小沢峠
至高崎
荒川
大宮
青梅
豊岡
川越
浦和
拝島
所沢
58分
練馬
川口
赤羽
八王子
立川
新宿
池袋

秋の行事

● もみじ狩り

10月15日～11月30日迄

全山紅葉にいろどられ別天地である。

● 秋季例法要

11月17日　午前10時　本堂

11時30分　救世大観音

● 大黒祭

12月10日　午前10時　本堂

新年祈禱

● 昭和56年1月1日新年元旦祈禱

本堂　10時